ハリーポッターと友人帳を持つ少女

ゆずぽん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハリーポッターと友人帳を持つ少女

【Ｎコード】
Ｎ５７０６Ｚ

【作者名】
ゆずぽん

【あらすじ】
友人帳の名前をほとんど返しきった夏目彩恵（女）はいつも通り学校に行き妖怪に追われつつも楽しい毎日を送っていた。しかし、ある日近くの神社に立ち寄ってみるとそこにはマントをきたヴォルデモートと名乗る男だった。彼にいとも簡単に殺された彩恵は目を覚ますと次元が違う過去の世界？！しかも友人帳がまた手元に？！そして親戚はあのサンタ風な校長？！彩恵は友人帳と妖怪とともにさまざま出会いをしていく・・・

０１　死と第二の人生。親戚はサンタ？（前書き）

はりぽたで特に双子が好きなので、めっちゃ活躍しちゃいます。
ハリー達より主人公＋双子が目立つことも多々・・・。
死ぬはずのキャラが死にません。
このお話は秘密の部屋から入ろうと思ってます。

０１　死と第二の人生。親戚はサンタ？

私、夏目　彩恵は死んだ。いつものように妖怪たちに追われつつも学校で皆と笑って過ごしていた。でもあの日だけは少し違った。見かける妖怪や幽霊が怯えたようにひそひそしていたのだ。その時はあまり気にしていなかったが、今になって考えるともっと気を付けておけばよかったと思う。

その日私はなぜか近くの神社によった。別に学校で何かあった訳でもないし、妖怪たちに追われてというわけでもない。ただ今までに感じたことのないモノを感じたのだ。妖怪とも幽霊とも違う。けれど少し恐ろしい何か・・・・。

彩「誰かいるの・・・？」

？「ほう、小娘。俺様が見えるのか？？」

そこにはマントのようなものを被った男がいた。しかしそれを見ていると彩恵は違和感を感じた。

彩「その姿・・・本物じゃない・・？その人に憑りついてるの？？」

？「！！この俺様の姿を見破るか！面白い女だ。だが・・クルーシオ！苦しめ。」

彩「いやあぁぁぁ！！！！」

彩恵は突然何かに張り付けられたような感覚と途轍もない痛みに襲われ、その痛みに叫んだ。

イヤダ！イヤダイヤダイヤダイヤダイヤダッ痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！！やめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてやめてッッ！！！

？「俺様の名はヴォルデモートだ。何故かこの世界に辿り着いてしまったが、運のない娘だ。帰ろうとした俺様を見つけてしまうとは！！！お前に免じてこの世界を支配するのはやめておいてやろう。」

と言って突然グニャッと景色が歪みヴォルデモートは笑いながらその中へ消えていった。

彩「あああぁぁぁ！！！」

友人帳・・・・・。

彩恵は友人帳に載っていた殆どの名前を返し終わっていた。しかし名前は逆に増えていた。それは救われた妖怪や仲良くなった妖怪、そして土地神などが彩恵を慕い名を預けいつでも呼んで欲しいと言ってくれたのだ。彩恵にとって友人帳はもう祖母の形見ではなく、自分の友人・仲間との繋がりになっていた。このまま死んでも離したくないと大事にきつく抱きしめた。

彩「み゛・・・・・皆・・・・・・・。」

サヨナラ

そこで意識が途切れ死んだと確実に思った。

そう。そうなのだ。

彩「私死んだはずなのになぁ・・・。」

［?彩恵。どうしたのだ。］

彩「なんでもないよ。晃(こう)。」

晃はこの世界に来て初めて見つけた妖怪で、今住んでいる家の前に傷ついて倒れていたのを助けたことが始まりだった。最初は警戒していたが、いまでは友人帳に名前を書きいつもともにいるようになった。簡単に言えば文句を言ってこないにゃんこ先生。晃の元の姿はにゃんこ先生のようだが小さくなった姿はあの狸猫ではなく子犬のようだ。

［しかしこの友人帳とは不思議だな。こいつら全員彩恵の友人なんだろ？］

彩「まぁね。（まさか燃えずにそのまま手元にくるなんて・・・。）」

そう。友人帳はなぜか私の手元にあるのだ。あの神社で死んだはずの私は目が覚めると5歳位のサイズになっていた。でも家は昔預けられた親戚の家で、その後見事にたらい回しにされた。親戚の顔も見たことある人ばかりだった。でも、昔のように祖母にレイコさんの名前もないし唯一手にしていた友人帳を妖怪達は奪いに来ることもない。友人帳の名前を呼ぶと妖怪達から色々教えてもらった。第一に、ここは以前の世界とは少し違う世界らしい。レイコさんがいないことや前にあった妖怪と違うものがいたのも納得出来た。

第二に、名前を書いた皆もなぜかこの世界にきてしまったらしい。しかし皆無事だそうだ。正直ホッとした。
第三に、にゃんこ先生は名前を書いていないため来れなかったらしい。にゃんこ先生からの伝言で「まぁ達者に生きろ軟弱。」だそうだ。にゃんこ先生らしい一言だ。
第四に、この世界の両親はやっぱり死んでいて・・・藤原夫妻も存在しないのだ。流石にこれは泣いてしまった。
両親との思いではほとんどないからか自分が冷めているのかはわからないが、またいないのかと思っただけだった。しかし藤原夫妻とは最近まで過ごしていた訳で・・・あんなに温かい親戚はいなかったから・・悲しかった。この世界にあんな温かさをもった親戚は存在しないのだ。そう思うと涙が止まらなかった。この世界にきて5年経って今は親戚に仕送りをして貰い寮のような所に住んでいる。正直言ってボロいがそこの大家さんが何も聞かず置いてくれている。よくおかずをタッパに入れて持ってきてくれる。特に肉じゃがが個人的に一番美味しいような気がする。晃も大家さんによく食べ物をもらったりしていて懐きようが半端ない。

大家「彩恵ちゃ～ん。なんかお手紙来てたわよ。」

ポストが無いため手紙はすべて大家さんが受け取っている。彩恵はお礼を言い、手紙を受け取って自分の部屋に晃と入った。

彩「？誰からなんだろ・・・。仕送りはこの間来たし。」

［開けてみれば分かるだろう。］

彩「そうだね。・・・・・えーっと・・・・はぁ？？」

［どうかしたのか？］

彩「・・・いたずらみたい。なんなの・・・ホグワーツ入学許可証って。」

彩恵はビリビリに破いて捨てた。そしていたずらした相手に心当たりがあるか考え始めた。しかし、

大家「彩恵ちゃーん！お客さんよ～！開けてくれる？？」

彩「あ、はい！！」

ガチャッ

彩「・・・あのまだクリスマスじゃないですよ。サンタさん。」

そこには大家さんと全身黒の男の人（私がサンタ発言した途端後ろを向いて吹いた。）と白いお髭のお爺さん。まさしくサンタ。

？「残念ながらサンタじゃないんじゃよ。」

彩「あ゛・・・すみません、つい。どなたですか？」

？「初めまして。儂はアルバス・ダンブルドア。ホグワーツ魔法学校の校長で、君の母方の親戚じゃ。」

０１　死と第二の人生。親戚はサンタ？（後書き）

どうだったでしょうか？
この作品は魔法使いの他に妖怪や土地神を沢山出したいと思っています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5706z/

ハリーポッターと友人帳を持つ少女

2011年12月19日00時52分発行